那　珂　54

― 那珂遺跡群第119次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1035集

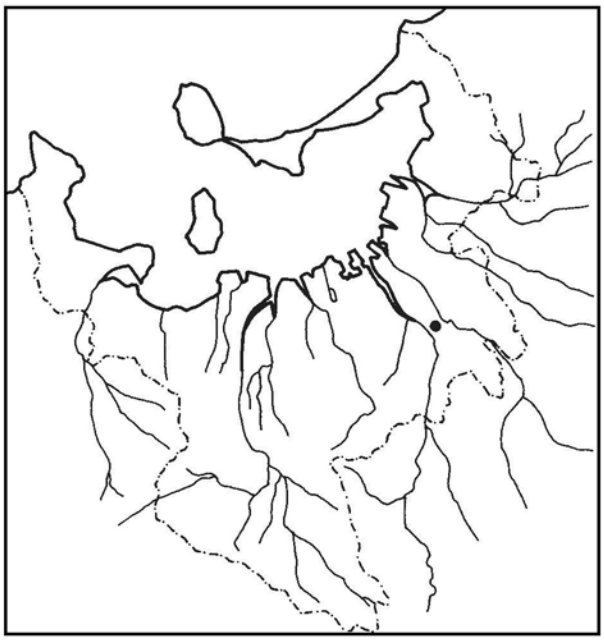
２００９

福 岡 市 教 育 委 員 会

那　珂　54

― 那珂遺跡群第119次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1035集



遺跡略号　ＮＡＫ－１１９
調査番号　０７２１

２００９

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群の発掘調査報告書は共同住宅建築に伴う調査成果についての記録です。この調査では弥生時代の集落と中世の溝を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2009年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例　言

□本報告書は博多区那珂１丁目704の共同住宅建設に伴って2007年６月25日から７月26日にかけて発掘調査を行った那珂遺跡群第119次調査の報告書である。
□本書に収録した発掘調査は福岡市教育委員会の屋山洋が担当した。
□遺構実測は屋山が、遺物実測は名取さつきと屋山が、遺構の写真撮影と遺物写真撮影は屋山が、製図は熊谷幸重が担当した。
□遺構・遺物番号はそれぞれ通し番号とした。

遺跡調査番号	０７２１	遺跡略号	ＮＡＫ－119	分布地図番号	東光寺　37
調査地地番	福岡市博多区那珂１丁目704				
開発面積	162㎡	調査面積	156.9㎡	調査原因	共同住宅建設
調査期間	2007年６月25日～2007年７月26日		担当者	屋山　洋	

本文目次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　調査の記録 …… 6
　1　調査の概要 …… 6
　2　弥生時代の遺構と遺物 …… 6
　　1）井戸 …… 6
　3　古代から中世の遺構と遺物 …… 10
　　1）溝 …… 10
　　2）土坑 …… 10
　4　その他の遺物 …… 12
　5　小結 …… 12

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000） …… 2
第２図　調査地点位置図（1/4,000） …… 3
第３図　調査区位置図（1/500） …… 4
第４図　調査区全体図（1/100） …… 5
第５図　SE011遺構・遺物実測図（1/20・1/3） …… 7
第６図　SE011遺物実測図（1/3） …… 8
第７図　溝・土坑 遺構遺物実測図（1/30・1/3） …… 11

表１　遺構一覧表 …… 12

図版目次

図版１　1．Ⅰ区全景　2．Ⅱ区全景 …… 13
図版２　1．SE011遺物出土状況　2．SE011完掘状況 …… 14
図版３　1．SK006　2．SK006土層 …… 15
図版４　1．SD005・SK006　2．SD005瓦出土状況 …… 16
図版５　1．SD004・SD005土層　2．SD004土層 …… 17
図版６　1．SD005土層　2．SP001遺物出土状況 …… 18

Ⅰ．はじめに

1　調査に至る経過

平成19年（2007年）5月16日付けで森田孝氏から福岡市教育委員会埋蔵文化財第１課に福岡市博多区大字那珂字堂ノ上1150－４・５（現　那珂１丁目740の一部）の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書（19－２－128）が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財である那珂遺跡群の中に位置し、周辺の発掘調査では弥生時代から古代を中心とする集落等の遺構が確認されているため、申請地においても遺構が存在すると予想された。そのため埋蔵文化財第1課では遺構の有無を確認することが必要であると判断し、５月22日に重機を使用して確認調査を行った。その結果、現地表面から深さ40㎝で地山である鳥栖ロームに達し、遺構と考えられる掘り込みを確認した。その結果と建設予定建物の基礎設計を照らし合わせたところ、計画されている建物基礎では遺跡の破壊が避けられないため建設に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を行い、記録保存を図ることで両者の合意が成立した。以上の協議をうけて平成19年（2007年）６月25日から７月26日の期間で発掘調査を行った。調査期間中は調査事務所として隣接地の借家や水道を提供して頂き多大なご協力を頂いた。

2　調査の組織

調査主体　教育委員会文化財部埋蔵文化財第１課

埋蔵文化財第１課課長　　山口譲治

調査係長　　米倉秀紀

調査庶務　　（前）鈴木由喜　（現）古賀とも子　（文化財整備課）

調査担当　　屋山　洋

作業員　　石田和子　岩田淳二　岡部安正　片岡武俊　河原明子　桑原美津子　豊田忠一　中村健三　夏秋弘子　西美由喜　吹春憲治　本郷満子　前田佳代　水野由美子

整理作業　大石加代子　熊谷幸重　藤野洋子　村上恵子

3　立地と環境

那珂遺跡群は福岡平野の中央を博多湾に向かって流れている那珂川と御笠川に挟まれた標高５～10mの低丘陵上に立地する遺跡群である。低丘陵は阿蘇山の噴火火砕流である八女粘土層と鳥栖ローム層からなり、鳥栖ローム層の上面が遺構検出面となることが多い。近隣の遺跡としては春日市から伸びる低丘陵上に博多湾側から比恵遺跡群、那珂遺跡群、五十川遺跡、井尻Ｂ遺跡、寺島遺跡、須玖・岡本遺跡と続き、また谷を挟んで東側に並ぶ丘陵上では那珂君休遺跡、板付遺跡、高畑遺跡、麦野Ａ遺跡が並んでいるが、奴国の中心部と考えられている春日市の須玖・岡本遺跡から至近距離にあるだけに弥生時代初頭の環濠集落から弥生時代の終末期にかけての遺構が密集して見られる地域であり、銅剣などの青銅器が数多く出土すると共に鋳型など青銅器関連の遺物が多く出土し、青銅器生産拠点の一つであったことを証明している。

那珂遺跡群は北側に隣接する比恵遺跡群と連続する遺跡で、弥生時代中期以降は奴国の拠点的な集落として栄え、古墳時代になると那珂八幡古墳や東光寺剣塚古墳などの前方後円墳が築かれる。古墳時代後期から古代にかけては比恵遺跡群側に大型の掘立柱建物群と柵列が見られるようになり、これは大宰府の前身である「那津官家」と考えられている。本調査地点周辺は現在ほとんど凹凸が見られないが、これは戦前の区画整理によるものであり、本来は丘陵とそれを開析する谷部が入り組んでい

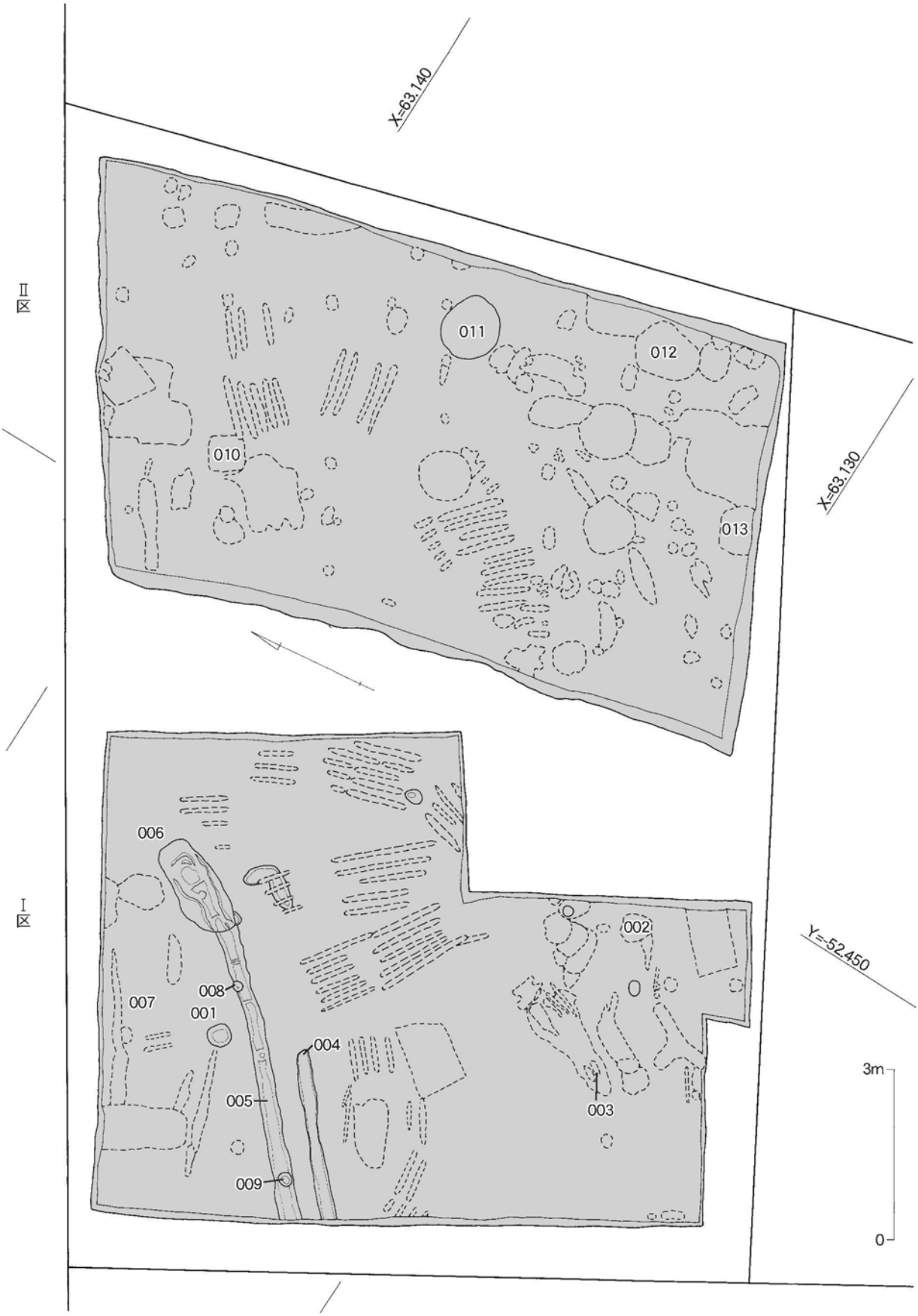
1. **那珂遺跡群**
2. 比恵遺跡群
3. 山王遺跡
4. 東比恵遺跡
5. 雀居遺跡
6. 東那珂遺跡
7. 板付遺跡
8. 高畑遺跡
9. 諸岡B遺跡
10. 諸岡A遺跡
11. 五十川遺跡
12. 高木遺跡
13. 井尻B遺跡
14. 横手遺跡
15. 曰佐遺跡
16. 笹原遺跡
17. 三筑遺跡
18. 麦野A遺跡
19. 麦野B遺跡

第１図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

□ は那珂遺跡群の範囲（2008年10月現在）

第２図　調査地点位置図（1/4,000）

第３図　調査区位置図（1/500）



第４図　調査区全体図（1/100）

たものと思われる。今回の調査区は那珂遺跡群の北側西端にあたり、調査区から西に30m程で丘陵端部に至る。

Ⅱ．調査の記録

1　調査の概要

調査区は台地西端部の西側に傾斜する斜面上に位置し、現在はそれを段状に造成して畑や宅地として利用している。この造成は丘陵端部の包含層堆積の観察から少なくても古代には始まっていたと考えられる（福岡市埋蔵文化財調査報告書　第291集　『那珂５』第14次調査）が、現在の状態に近づいたのは近世以降と考えられる。本調査区北側に隣接するアサヒビール竹下工場（1920年代に操業開始）の敷地内の調査（那珂遺跡群第14次調査）も本調査区と同様に大規模な削平を受けており、調査区の西側では住居跡等の遺構が出土しているが、東側では井戸や貯蔵穴などの深い遺構しか出土していない。今回の第119次調査地点では平坦面を作り出すため調査区全体が削平されており、遺構の遺存状況は悪い。特に調査区東側では隣地との高低差が現状で1.2mもあるため、大幅な削平を受けて井戸以外の遺構が消滅したものと考えられる。

現地表面の標高は7.8m前後で、遺構面までの深さは20～40cmを測る。今回の計画では建物を東西に２棟建てるため敷地全体の調査が必要となった。そのため、まず西側の建物部分をＩ区として調査を行い、終了後に東側建物部分（Ⅱ区）の発掘調査を行った。東西建物の間は建物が建たないことから発掘調査は行っていないので、将来この部分で掘削を伴う工事をする場合は、今回と同様に埋蔵文化財の発掘調査が必要である。

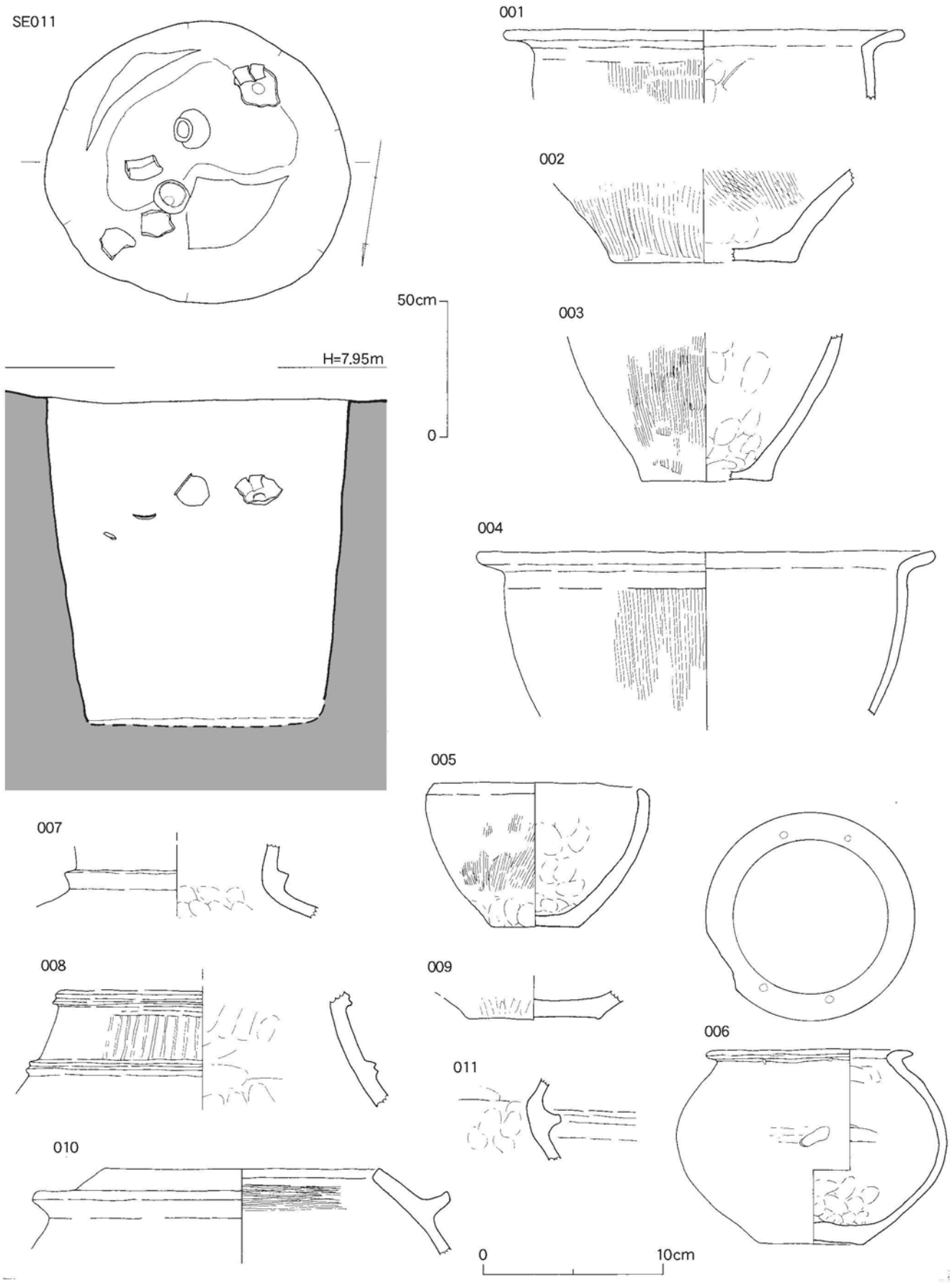
調査はまず６月25日に機材を搬入し、翌26日に重機でＩ区の表土剥ぎを行って調査を開始した。地山であるロームの状態から遺構面は１m弱ほど削平されていると思われるが、そのため遺構の密度は北側に隣接する第14次調査や東側隣接地の第115次調査など周囲の調査区に比べると薄かった。Ｉ区の調査は６月29日に終了したため、７月３日に重機でＩ区の埋め戻しとⅡ区の表土剥ぎを行った。７月上旬から中旬は雨が続いたため、調査は一時中断した。Ⅱ区の調査は７月24日に終了し、７月26日に重機での埋め戻しと調査機材の撤去を行った。検出した遺構は弥生時代が井戸１基、古代末から中世頃と思われる土坑と溝、近現代の土坑と井戸等を確認した。

2　弥生時代の遺構と遺物

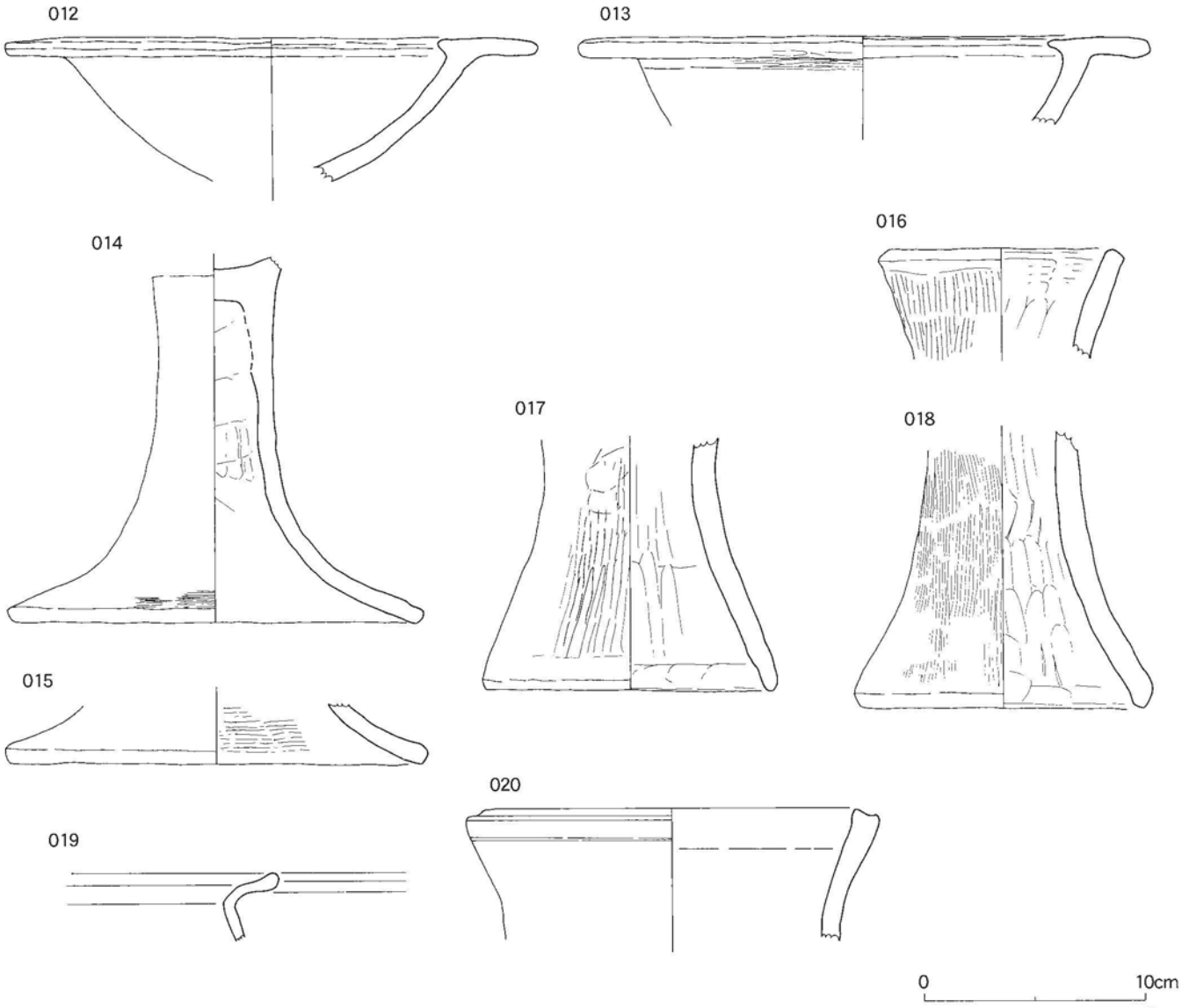
１）井戸　Ⅱ区で１基確認した。

SE011（第５図）Ⅱ区東側で検出した。ここは東側隣接地との境に近いが、東側に20m程離れた所に位置する第115次調査（『那珂50』福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集）では本調査地点の現地表から約1.6m高い標高9.4m前後で遺構が確認されている。調査地点は西側に傾斜しているため高低差は小さくなるにしても、すくなくとも東端部では１m以上の削平を受けていると思われる。

井戸の平面形はやや東西に長い円形を呈し長径113cm、短径102cm、遺構検出面からの深さ122cm、八女粘土上面からの深さ80cmを測る。現地表面からの深さ40cm程で鳥栖ロームと八女粘土の境界部分に達するが、ちょうどその高さで完形に近い鉢や高坏、甕の破片がまとまって出土した。底面は中央部を若干掘りすぎたため、記載した図の底面断面線は推定線である。前述したように現地表面は１m以上の削平を受けており、削平前の深さは2.5m以上あったものと思われる。出土遺物（第５・６図　001～020）。001は甕口縁部である。復元口径22cmを測る。明黄褐色を呈し胎土に0.1㎜程の白色砂を多く含む。002・003は甕底部である。002は復元底径10cmを測る。外面は灰白色で黒斑あり、



第５図　SE011遺構・遺物実測図（1/20・1/3）



第６図　SE011遺物実測図（1/3）

内面は淡黄褐色を呈す。胎土には１㎜以下の砂粒を少量含む。調整は外面が縦ハケ、外底部がナデ、内面が斜めハケ、底部に指オサエを施す。焼成は良好である。底部の厚みは７㎜と薄めで胴部は外反しながら立ち上がる。003は復元底径7.2㎝を測る。外面は黄褐色で黒斑あり。内面は黄白色を呈す。胎土には１㎜ほどの白色砂を多く含む。焼成は良好である。調整は外面が縦ハケ、内面は指オサエ後ナデ、外底部にはナデを施す。004は鉢である。口縁はＬ型を呈し、復元口径は25.2㎝を測る。色調は淡い灰黄褐色で一部黒褐色を呈す。胎土は１㎜以下の白色砂を多く含む。調整は口縁は両面とも横ナデ、胴部は外面に縦ハケを施し、内面は摩滅のため不明瞭であるがナデと思われる。焼成は良好である。005は鉢である。ほぼ完形で出土した。口径12.3㎝、器高8.0㎝、底径4.8㎝を測る。色調は橙色から橙白色を呈し、胎土中に細かな砂粒を多く含む。調整は口縁が両面とも横ナデで、内面は胴部から底部にかけて指オサエ後にナデ、外面は胴部上半が縦ハケ後ナデ、下半が指オサエ、外底部にはナデを施す。006は精製の鉢でほぼ完形の状態で井戸の上半部から出土した。口径11.4㎝、器高10.8㎝、底径5.4㎝、最大胴径14.8㎝を測る。色調は外面は赤色顔料がほとんど剥落して黄灰褐色を呈し、内面は灰褐色を呈す。底部は厚さが１㎝と厚いが、胴部は４㎜と薄く、胴部中央に最大径がくる。口

縁はＬ字型をなし、やや外湾する。口縁部には蓋を留めるための孔（径４～５㎜）が見られる。胴部中央に焼成後に外面から穿孔を施す。調整は外面側は不明瞭であるが横方向のミガキと思われる。内面は全体にナデを施し、底面と口縁直下に指オサエの痕跡が残る。007～009は壺である。007は壺の頸部である。橙色から赤褐色を呈し､胎土には１㎜以下の砂をやや多く含む。調整は外面が摩滅のため不明で、内面は頸部にナデ、肩部には指オサエ後ナデを施す。外面突帯上下の窪みに赤色顔料が付着しており、本来は全面に塗布されていたと思われる。008は壺頸部でM字型突帯を２条貼り付ける。外面は赤色顔料が塗布され赤褐色を呈し、内面は淡黄褐色を呈す。胎土に１㎜以下の砂を多く含む。M字型突帯は貼り付け後に水平方向のナデ、突帯の間は縦方向のミガキを暗文状に施す。内面調整は指オサエ後軽くナデを施す。焼成は良好である。009は壺底部で復元底径７㎝を測る。外面全面に赤色顔料を塗布するが、外底部は部分的な塗布である。内面は灰色を呈す。調整は外面が縦方向のミガキ、外底部がナデ、内底部は指オサエ後ナデを施す。010は無頸壺か。胴部はやや球形を呈するものと思われ、肩部の突帯は高めでやや内湾する。外面の突帯から下には赤色顔料が一部付着しており赤褐色を呈するが、他の部分は橙色を呈す。調整は内面の口縁直下のみにハケ目がみられ、後はナデを施す。胎土には少量の白色細砂を含む。011は甕型土器か。胴部突帯部である。外面には赤色顔料が塗布されているが、突帯の上面には赤色顔料が見られるのにたいし突帯頂点と下面に顔料が見られないのは、塗り分けであろうか。外面の地肌は暗灰褐色、内面は灰褐色を呈す。調整は外面全面にナデ、内面は指オサエ後ナデを施す。焼成は良好である。012～015は高坏である。012は坏部で復元口径24㎝を測る。色調は黄褐色から赤褐色を呈し、胎土中には２㎜以下の砂粒を多く含む。調整は口縁平坦部が横ナデの他は遺存状態が悪く不明である。内面に赤色顔料の痕跡が残る。013も坏部で復元口径は25.8㎝を測る。色調は内外面とも赤色顔料の痕跡が残り、全体に赤褐色を呈していたが現状ではほとんど剥落している。調整は横方向のミガキを施す。014は高坏脚部である。復元底径は18.7㎝を測る。遺存状態は不良で器面の多くが剥落し、一部赤色顔料が残る。外面は脚端部にわずかにハケの痕跡が残る。内面は同じく端部に横ナデがみられる他、上半に強い横ナデ、中央部に指オサエを施す。胎土には１㎜程の白色砂を多く含む｡焼成は良好である。015は脚部端である。復元底径は19㎝を測る。内面には横ハケを施す。外面の調整は不明で赤色顔料がわずかに残る。胎土には２㎜以下の砂粒と雲母片を多く含む。016～018は器台である。016は復元口径11㎝を測る。黄褐色を呈し２㎜以下の石英粒と１㎜以下の長石を多く含む。調整は口縁端は両面とも横ナデの他、外面は縦ハケ、内面は横ハケで、口縁端より2.5㎝から下は横ハケ後に縦方向のナデを施す。焼成は良好である。017は器台脚部である。復元底径13㎝を測る。橙白色を呈し、２㎜以下の砂粒をやや多く含む。調整は口縁端が横ナデの他、外面は縦方向のミガキ、内面はナデを施す。018も器台脚部である。復元底径は13.4㎝を測る。明黄褐色を呈し胎土には２㎜以下の砂粒を多く含む。調整は口縁端が横ナデの他、外面は縦ハケ、内面は指オサエ後軽くナデを施す。焼成は良好である。019は甕口縁である。口縁は若干「く」の字型に立ち上がる。弥生時代中期後半～後期前半まで降る可能性がある。020は口縁部である。素焼きで暗赤橙色を呈す。胎土中に１㎜以下の白色砂を少量含み、細かな雲母片が内外面全体にみられる。焼成は良好である。外面の口縁端から１㎝下にわずかな段がみられる。調整は外面と内面の口縁端から18㎜は横ナデ、内面は不明瞭であるが丁寧な縦ナデと思われる。縦ナデの部分に板による圧痕と思われる縦方向の凹線がある。直径は20㎝弱を測る。破片が小さく器形は不明であるが、直口壷口縁の可能性がある。他の土器に比べて胎土、調整共に良好である。遺物のほとんどは井戸埋土の上半から出土した。特に検出面から深さ40㎝で完形の鉢が２個の他、高坏や甕棺の破片が出土したのは井戸の埋没時期を示すものと思われる。019は若干新しくなる可能性があるが、

紛れ込みの可能性も高いと考えられる。ただ井戸の時期が弥生中期後半から後期前半としても、那珂・比恵遺跡群で確認されている多くの弥生時代の井戸が弥生時代後期後半から終末であり、那珂遺跡でも古い時期の井戸のひとつである事は確実である。

3　古代から中世の遺構と遺物

1）溝　Ⅰ区で2条検出した。

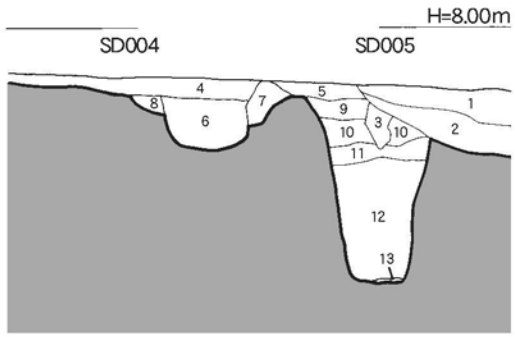
SD004（第7図）Ⅰ区の北西側で検出した。主軸をN－52°－Eにとり、等高線に直交する。幅27cm､深さ7cmを測る。断面はU字型で、埋土は灰茶褐色を呈す。出土遺物は素焼きの土器小片2点のみで器種、時期共に不明である。覆土から中世後半から近世まで降る可能性が高いと思われる。SD005と平行しており12世紀まで遡る可能性もあるが、調査区近辺では古い地割りが後世まで残っていた可能性があり、その影響を受けたものと思われる。

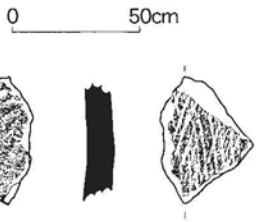
SD005（第7図）Ⅰ区の北西側に位置し、SK006から谷へと延びる。SD004に平行する。現状で幅37cm、深さは約40～50cmを測り、断面はV字形を呈す。底面は平坦ではなく中央部には径20cm、深さ3cmの柱穴状の掘り込みがあり、またSK006から60cm程西側でも幅の狭い窪みがみられる。SK006との境界から中央の柱穴状掘り込みまでは底面に段が見られるが、掘り込みから南側は平坦で緩やかに南側に傾斜する。排水用の溝であろうか。土層観察では底面から深さ25cmまでは地山のロームブロックを多く含んでおり、人為的に埋めたものと思われるが、最下層には粘性の褐色土が薄く堆積しており、これは滞水による堆積の可能性が考えられる。覆土中から瓦片などが出土した。出土遺物（第7図　021～025)。021・022は須恵器甕胴部である。021の現状は灰色を呈するがハケ目の窪みの奥は暗灰色を呈しており、もとは全体が暗灰色を呈していたが表面が若干摩滅したものと思われる。内面は暗茶褐色である。胎土中に0.3～1㎜程の白色砂を多量に含む。焼成は良好である。外面はハケ目、内面は同心円状のタタキ後にナデを施す。022は外面黒褐色、内面暗青灰色、胎土は赤紫色を呈して精良である。外面側に0.5㎜以下の白色砂を多く含む。調整は外面が平行タタキの後ナデ、内面には同心円状のタタキを施す。焼成は良好である。023は須恵器片である。坏蓋片か。両面とも灰色を呈し、外面は一部に白い筋がみられる。胎土は粗めで0.3～0.5㎜の白色砂を外側に多く含む。焼成は良好である。調整は内面が静止状態での指ナデ、外面は天井部はヘラ削り後のナデか。坏部は粗いヘラ削りを施す。024・025は土師質の平瓦である。024は表面は黄白色を呈し、胎土は淡橙色で0.3～2㎜程の白色砂を多量に含む。焼成は軟質で摩滅のため調整は不明である。025は淡白橙色を呈す。胎土は淡橙色で0.3～1㎜程の白色砂を多く含む。平面図右側でいうと上縁と右縁の端部が遺存しているが、上縁側は板状の圧痕がある。図の右側端部は板で強くナデており、中央に鎬状の稜線がみられる。焼成が軟質なため調整は不明瞭であるが、凸面はナデか弱いケズリで凹面には布目圧痕が見られる。その他の遺物としては白磁の小片が1点出土している。遺構の時期としては連続する遺構であるSK006から同安窯系青磁片が出土していることから、SD005の時期もそれと同じ12世紀後半以降と考えられる。

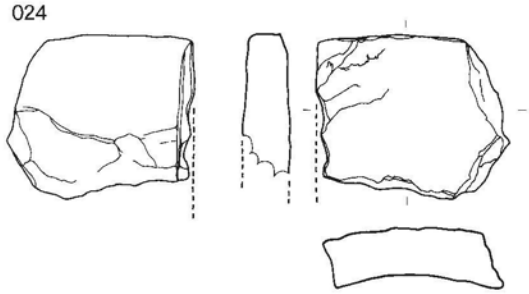
2）土坑　Ⅰ区で1基検出した。

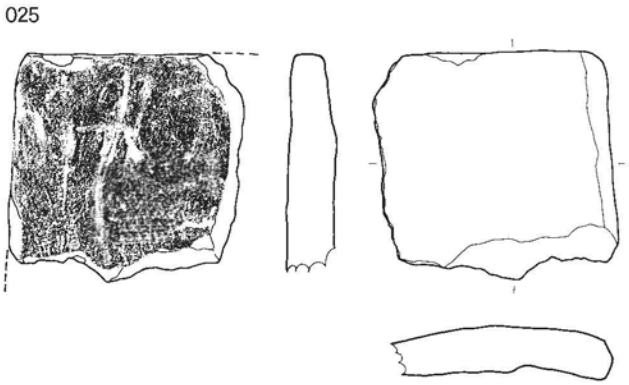
SK006（第7図）Ⅰ区の北西端で検出した南北に長い長方形で主軸をN－32°－Eにとる。現状で長径183cm、短径81cmを測る。底面北側は低く窪んで柱穴状を為す。それから南西側のSD005につながるように溝状を呈す。調査時にSK006とSD005の切合いを精査したが不明瞭であった。中央の土層ベルトの観察によると遺構断面は半円形で、覆土は第3層の明褐色土が主体であるが5～10cm程のロームブロックを多量に含んでおり、一気に埋められたと考えられる。土坑と溝がつながることか

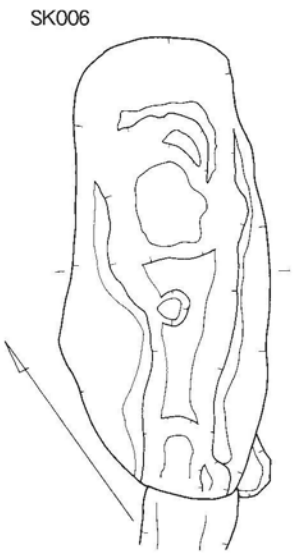
SD004・005
1　撹乱　建物解体時
2　撹乱
3　木の根
4　黄褐色土
5　茶褐色土　白色砂を多量に含む
6　灰色土　やや茶色を呈し土器小片を含む
7　茶褐色土　遺構覆土
8　茶褐色土　遺構覆土
9　茶褐色粘質土
10　茶褐色土　黄白色粘土ブロック含む
11　暗茶褐色土　やや灰色を帯びる
12　明茶褐色土　地山ロームブロックと橙色土（下層ローム）ブロックを多量に含む
13　褐色粘質土　滞水痕跡か

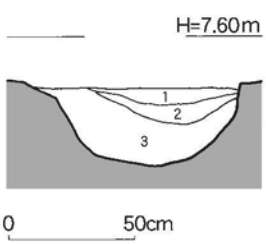


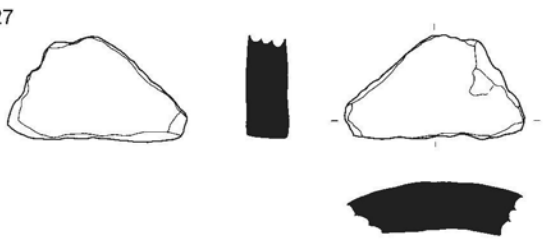












SK006
1　暗茶褐色土　白色砂を多量に含む　水平堆積
2　暗褐色土　5㎝大のロームブロックを含む
3　暗褐色土　5～10㎝のロームを多量に含む

第７図　溝・土坑 遺構遺物実測図（1/30・1/3）

ら雨落ち溝などの性格が考えられるが、詳細は不明である。覆土中から瓦片などが出土した。出土遺物（第７図　026～028）。026・027は須恵質の瓦である。026は平瓦で、027は丸瓦の可能性がある。026は灰白色を呈し胎土中に0.5㎜程の白色砂を多量に、また１㎜ほどの砂粒を少量含む。焼成は軟質である。凸面は平行タタキであるが、左上にタタキがない方形の区画がみられる。文字瓦であった可能性があるが現状では文字は確認できない。凹面の調整は不明である。027は灰色を呈し胎土中に１㎜程の白色砂をわずかに含む。全体に１㎜程の黒色の点が見られる。焼成は硬質であるが、摩滅が著しく調整は不明である。028は須恵器甕である。外面は暗青灰色、内面は灰色、器壁中央は淡い褐色を呈す。１㎜以下の白色砂を多量に含む。焼成は良好である。外面は蓆状タタキ、内面は同心円状のタタキである。SD005のところで述べたように覆土中から同安窯系青磁の小片が出土しており、遺構の時期としては12世紀後半以降である。

４　その他の遺物

近現代の土坑からは様々な遺物が出土している。SK013からは近代と思われる鉄鍋の鋳型が出土した。またSK012からは近世～近代と思われる染付碗と皿、鉢と共に中世と思われる瓦質の鉢が出土した。その他の攪乱からは古墳時代の土師器甕片の他、古代末から中世の白磁碗Ⅳ類や白磁皿Ⅸ類の破片が出土しており、今回の調査では確認できなかった時期の遺物も多く出土しており、弥生時代中頃から古墳時代初頭、古墳時代後期、古代から中近世と連続して遺構が存在したことを示している。

５　小結

弥生時代中期中頃から後期前半の井戸を１基と12世紀後半頃以降の土坑１基と溝２条を検出した。弥生時代の井戸は周辺の比恵遺跡群、那珂遺跡群、井尻Ｂ遺跡などで多く見られるものの、そのほとんどは後期後半から終末期の時期であり、中期後半から後期初頭にまで遡る遺構は少ない。近隣の調査では那珂遺跡群第11次や第109次調査、比恵遺跡群第82次調査で確認されている程度である。土坑と溝は12世紀後半以降であるが、等高線に直交して台地の縁部に延びることを考えると排水用の溝と考えられるが、その性格は明確ではない。調査区全体が強い削平を受けているが、北側の第14次調査地点では弥生時代や古代の遺構が密に出土しており、当調査地点にも集落が広がっていたものと思われる。

またSD005とSK006からは瓦が出土しているが、近隣の第14次や第115次調査でも瓦が出土している。どちらも格子もしくは平行タタキののち丁寧にナデ消した（一部タタキが残存）瓦が出土しているが、第14次調査では９世紀と考えられる井戸から、第115次調査では７世紀後半と考えられる掘立柱建物などに伴って出土しており、本調査地点出土の瓦はこれらの瓦と同時期の可能性が考えられる。

遺構一覧表

遺構番号	区	性格	略号	形状	径(cm)	深さ(cm)	時代	遺物	備考
001	Ⅰ区	柱穴状遺構	SP	円形	41	31	古代以降	須恵器瓦?、須恵器甕（格子・同心円）、須恵器瓶?、土器片2点	
002	Ⅰ区	攪乱		不整円形	56	24	現代	土器片1点のみ	
003	Ⅰ区	攪乱		溝状	27×8	2	現代	白磁小片（皿?）	
004	Ⅰ区	溝	SD		27	7	中世後半～近世	土器片2点のみ（器種・時期共に不明）	
005	Ⅰ区	溝	SD		37	51	12世紀後半	同安窯系青磁片、須恵器（甕?3点、不明2点、坏蓋?1点、坏蓋か坏　6～7ｃ　1点）、土師質瓦（ナデ・布目）　3点、甕底部　1点（弥生時代中期）、高坏脚部（弥生）、不明土器片15点	
006	Ⅰ区	土坑状遺構	SK	隅丸楕円	183×81	36	12世紀後半～13世紀	瓦片　2点、須恵器甕（古墳～古代）13点、須恵器坏（古代か）1点、白磁片　2点、　土器片（不明）	
007	Ⅰ区	攪乱		溝状	26	13	現代	土器片（器種・時期不明）　2点	
008	Ⅰ区	柱穴状遺構	SP	円形	18	16		土器片（器種・時期不明）　3点、黒曜石　1点	
009	Ⅰ区	柱穴状遺構	SP	円形	31		11世紀後半～13世紀	白磁小片（碗?）	1段下げで消滅
010	Ⅱ区	攪乱		長方形	69		現代		
011	Ⅱ区	井戸	SE	円形	113×102	122	弥生時代中期中葉から後葉	L型口縁、甕底部、壺底部、高坏、鉢、壺、器台	
012	Ⅱ区	近代土坑		不整楕円形	119×83	61	近現代	鉄釘、染付碗・皿（近世～近代）、鉢（近代）、瓦質鉢、ガラス瓶片（多量）、須恵器坏蓋（ヘラ記号）	
013	Ⅱ区	近代土坑		隅丸長方形	87	32	近現代	染付碗（近代）、鋳型（近代）	

1. Ⅰ区全景（東から）

2. Ⅱ区全景（北から）

図版 2

1．SE011遺物出土状況（北東から）

2．SE011完掘状況（西から）

1．SK006（南から）

2．SK006土層（東から）

図版４

1．SD005・SK006（東から）

2．SD005瓦出土状況（東から）

1．SD004・SD005土層（東から）

2．SD004土層（東から）

図版 6

1．SD005土層（東から）

2．SP001遺物出土状況（南から）

報告書抄録

書　　名	那珂54
副 書 名	那珂遺跡群第119次調査報告
巻　　次	５４
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財報告書　　シリーズ番号　１０３５集
編 集 著 者	屋山 洋　　編集機関　福岡市教育委員会　　発行機関　福岡市教育委員会
作成法人ID	４０１３４　　発行年月日　2009年３月31日
郵 便 番 号	８１０－８６２１　　住　　所　福岡市中央区天神１丁目８番１号
電 話 番 号	０９２－７１１－４６６７
所収遺跡名	那珂遺跡群第119次 ふくおかけんふくおかしはかたくなか
所 在 地	福岡県福岡市博多区那珂１丁目704
コ ー ド	市町村　４０１３１　　遺跡番号　００８５
北　　緯	33° 34′ 16″　　東　　経　130° 25′ 58″
調 査 期 間	２００７０６２５～２００７０７２６　　調査面積　１５６.９㎡
調 査 原 因	共同住宅の建設　　種別　集落

主な時代と遺構・遺物

弥生中期～後期　井戸（鉢、高坏、甕、甕棺）

12世紀後半　溝（白磁、瓦）－土坑（同安窯系青磁片、瓦）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1035集

那珂５４

－第119次調査報告－

2009年（平成21年）3月31日

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印　　刷　株式会社 パナックスメディア
福岡市南区大楠２丁目11－27